

月曜3限放射線環境学「あなた自身ができそうな被災地の農業再生について」

私が被災地の農業再生のためにできることは、まず被災地の農業の現状を把握すること、そしてそれを発信していくことだと考える。恥ずかしながら私は、この放射線環境学を受講するまで、福島農産物の安全性が確保されているということを知らず、単なる既成概念から危険なイメージを抱いていた。関心はあるものの、現状がどうなっているのかは把握できておらず、それを知りたい、知らなければならないと思ったのが、そもそもこの講義を受講しようとしたきっかけである。実際は被災地の農作物で市場に流通しているものはきちんと検査を通過したものだし、福島のお米に関しては全てが検査されているということを知った。その検査や除染のために、科学的根拠に基づいた様々な研究や取り組みが行われている。危険か危険ではないかの判断、そしてそれを食べるか食べないかの選択は個人の自由であると思うが、事実を知らず、また、知ろうともせずに自分の抱くイメージのみで決断するのは余りにも身勝手であるように思う。

そしてこれは私にのみ限った話ではないのが問題である。一体、日本国民のうちどのくらいの人が被災地について正しい知識を持っているのだろうか。被災地について知ろうとしているのだろうか。震災から5年が経とうとしている今、徐々に人々や社会の被災地への関心は薄れていっているように思う。その際、ただ「危険だ」というイメージだけが残っているのである。こういった人たちに、得た知識を発信していくこと。それが被災地の農業再生のために私ができることだと考える。現在、大学の食堂でも被災地応援のための定食が販売されている。このことにより、食堂を利用する人の被災地への関心が高められるだろう。一方、ネット上でこの応援定食について揶揄する記事を見かけた。内部被ばくの危険性を考えず、偽善者としてこの定食を買う東大生とは、という内容であった。放射線の知識がほぼ皆無だった今までは、おそらくこの記事を見ても鵜呑みにしていたと思う。実際のところ記事の内容が全て否定できるとも言えないが、それでも私は得た知識を基にして、自分の判断でこの定食を食べようと思える。話が脱線してしまったが、この定食が食堂利用者の被災地への関心を高める効果があるように、私も自分が得た知識を発信して、その発信相手に被災地への関心を持ってもらうことはできると思う。

しかし、ついこの間まで正しい知識を持っていなかった私とその情報を発信して、説得力があるかは疑わしいという気持ちもある。何が足りないのか。それは、私が得た知識や考えは、すべて授業やメディアを通じた間接的なものだけということである。メディアを通じての知識には限界がある。間接的な情報だけに頼ると、いつまで経っても他人のままだである。実際に被災地に行き、自分の目で見て、自分の心で直接的に感じる必要があると思う。現に、被災地の農地の除染法にはまでい工法というシンプルで効率的、経済的なものが開発されたのに普及できていない。除染法を選択する役人たちが、現地を何度も訪れることなく採択したことが原因だ。いくらメディア環境が整っているといえども、現地の問題を机上の空論で済ませてはいけない。現場を分からないと話が始まらないというこ

とだろう。

以上のことから、被災地の農業再生のために私自身ができそうなことは、被災地の農業の現状について正しく把握すること、その際、間接的な知識にとどまらないために現地へ行き自分の直接的な体験をすること、そしてそれを発信することで人々の被災地の農作物に対する誤ったイメージを払拭するとともに被災地への関心を高めていくことだと考えた。